乙第２０号証

副本

令和６年11月６日

令和６年度
第１回総合教育会議
議事録

文京区

令和６年度第１回総合教育会議議事録

第　１　号

令和６年度　　第１回会議

日時：令和６年11月６日（水）午後１時10分

場所：第二委員会室

「出　席」	文　京　区　長	成　澤　廣　修
文京区教育委員会	教　育　長	丹　羽　恵玲奈
	教育長職務代理者	清　水　俊　明
	委　員	坪　井　節　子
	委　員	小　川　賀　代
	委　員	福　田　雅
「説明のために出席した区職員」	企画政策部長	新　名　幸　男
	企　画　課　長	横　山　尚　人
	児童相談所開設準備担当部長	栗　山　仁
	児童相談所開設準備室長	佐　藤　武　大
「説明のために出席した教育局職員」	教育推進部長	吉　田　雄　大
	教育総務課長	熱　田　直　道
	教育指導課長	山　岸　健
	教育施設推進担当課長	藤　咲　秀　修
	教育センター所長	木　口　正　和

令和６年度　第１回総合教育会議次第

日時：令和６年11月６日（水）午後１時10分

場所：第二委員会室

１　開会

２　議題

⑴　（仮称）文京区児童相談所設置に向けた文京区の取組について

（資料第１－１号，第１－２号）

⑵　世界に向けた学びを紡ぐプロジェクトについて　（資料第２号）

３　閉会

ファイルの中に里親のご案内と、ティッシュに児童相談所が誕生しますと入れ、オレンジリボンの期間には直接区民の方に配布をしたり、あとは、電子データも活用して広報しながらやっていきたいと考えています。

里親さんは非常に大事ですが、基本は一般の家庭の方なので、それだけ一緒に児相とケアしていかなければいけない対象だと思っています。児相としては大切なパートナーだと思っているので、そこを文京らしく育てていければと考えているところでございます。

○成澤区長　里親体験報告会を今なら区が都児相と協働していると、話を聞きに来る人たちはそれなりには集まるんですよね。

○児童相談所開設準備担当部長　今年度も50名を超える方が来てくださって。

○成澤区長　関心はあるけれども、実際に里親委託につながっているかというと、もう一ハードル、二ハードルあるということですかね。

○児童相談所開設準備担当部長　あると思います。

○児童相談所開設準備室長　補足いたしますと、今、部長の栗山と区長もお話しいただいたとおり、里親、社会的養護をいかに区の中で根づかせるか。ここは区の中でしっかりとドメスティックな啓発を行うという面と、社会的養護に関しては、東京都全体も含めて、その仕掛けについて考えていく。また、里親さんの実際の勉強あるいは研修は広域的な取り組みが功を奏する場合もありますので、そのあたりは今後も区児相としてしっかり立ちながらも、都と連携しながら社会的養護の理解、さらに里親さん開拓に結びつくような動きを深めてまいりたいと考えてございます。

○成澤区長　来年４月開所、そして１月から一時保護委託スタートということで、少しずつ努力をしていきたいと思います。１月からは現実に子どもたちをお預かりすることになるので、ミスがあってはならないので、しっかりとした準備を進めていきたいと思います。きめ細かさを求めるために区児相をつくりますが、一時保護で言えば、区児相なんだから、保護者分離したけれども、伝通院の横にいるんだろうと言って、毎日取り返しに来るケースだってないとは限らないですね。そうすると、さらに一時保護委託をかけるということもあろうかと思うので、きめ細かさと同時に、そういったものについての配慮が必要なので、いろいろな悩みも出てくるとは思いますが、来年４月以降の開設に向けて、これからも準備を進めてまいりたいと存じます。

（２）世界に向けた学びを紡ぐプロジェクトについて

○成澤区長　次に、議題（２）です。

教育施策推進担当課長から資料第２号の説明をいたします。

○教育施策推進担当課長　私からは、資料第２号「世界に向けた学びを紡ぐプロジェクトについて」、ご説明いたします。

本プロジェクトは、将来の予測が困難であり、グローバル化がさらに進んだ社会で生き抜く力を子どもたちに身につけさせるため、国際バカロレア機構の協力のもと、取り組むものです。国際バカロレアとは、外交官など世界をまたにかけて働くご家庭の子どもがどこの国に行っても大学入学で困らないように、確かな力を身につけたことを証明するためのプログラムとして開発されたものです。

このプログラムは世界中で認められ、国際バカロレア機構は今では教育系では世界最大級のNPO団体となりました。国際バカロレア機構が提供するプログラムをカリキュラムとして取り入れ、厳しい審査の上、認められますと、国際バカロレア認定校となります。このバカロレア認定校でバカロレアの学位を取得すると、それは世界中で通用する国際資格となります。日本でも、文部科学省が中心となり、認定校を200以上にしようという動きがあり、2024年６月現在、249校となっております。また、世界には160カ国、約5800校の認定校がございます。

国際バカロレアは、多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、よりよい、より平和な世界の実現に貢献できる探究心、知識、思いやりに富んだ若者を育成することを目的としております。特徴的な指導のアプローチとして、探究を基盤とした指導等が挙げられます。

本区では、この国際バカロレアの知見を生かした教員研修を令和７年度から実施し、教員がこれまでの指導方法を見直し、授業を変えていくことを目指します。この実現のため、教員研修プログラムを国際バカロレア機構に開発していただくことになっております。

また、令和６年度中の協定の締結を予定しております。加えまして、令和７年度中に国際バカロレア機構と共催で、文京シビック大ホールでシンポジウムを開催し、このプロジェクトについて保護者、地域の方々に広く知っていただく機会としたいと考えております。

説明は以上となります。

○成澤区長　ただいまの説明につきまして、教育委員の皆様からご意見等を頂戴できればと思います。

○小川委員　教えていただきたいんですけど、一般的に、高校でバカロレアの認定を取っている学校さんはいろいろなところで聞くことはあるんですけれども、ここでは小学校、中学校の教育の中

にバカロレアを入れるということかと思うんです。海外の大学とかにそのまま受験できるようにということで、多分、高校にバカロレアの認定制度をとっているという認識があるんですが、小学校、中学校で入れることの仕組みというか、メリットというか、追加説明をお願いいたします。

○教育施策推進担当課長　バカロレアの知見を生かして文京区の先生方がこれまでの指導方法を見直して、指導方法を変えていくというところを１つ大きな主眼としていきたいと考えております。具体的に申し上げますと、探究的な学びという視点で授業をよくしていこうと考えてございます。国際バカロレアはさまざまな手法を持っているのですが、探究的な学びにつきましてはかなり開発が進んだものをお持ちでありますので、一つ、この探究的な学びという視点で小・中学校の教員が研修を受けることによって授業を変えていき、それが子どもたちに還元されていくことを目指してまいりたいと考えております。

○丹羽教育長　補足していいですか。今の説明のとおりなんですけれども、そもそもＩＢのプログラムの大学入試の資格になるものは、高校生がやるＤＰ（Diploma Programme）というのがあって、日本でも受け入れている大学がありますけれども、それをやると海外の大学も行けます。それ以外に、人材育成ということで、年齢に応じて、PYP（Primary Years Programme）という３歳から 12 歳のもの、あと MYP（Middle Years Programme）という 11 歳から 16 歳、大体中３から高１。PYP と MYP というプログラムもセットでつくっておりまして、主に PYP と MYP の学びのところを今回のこのプロジェクトでは研修の内容にしてもらって、それを教員に受けてもらおう。ＤＰは、おっしゃるとおり、完全に大学入試の資格のためのものなので、日本で言うと高２、高３の子が取りますよね。そういうことを考えております。

○小川委員　いろいろなものがあるとわかりました。じゃ、先生のＦＤの要素もすごく強いというイメージでよろしいんですかね。

○成澤区長　ＤＰのところばかりが、特に日本では、ＩＢイコールＩＢスコアだと。ＩＢスコアで何点とれればアメリカのどこどこ大学に入れる。要は入試の事前の推薦基準みたいなもので、ＩＢ、ＩＢと思っていらっしゃる保護者の方たちが結構いらっしゃるんですけども、我々がやりたいのはそこではなくて、逆にそれをやってしまうと、ただでさえ普通教室が足らなくて、教育委員の先生たちにもご心配をおかけてしているのに、文京区で学びたいという子をどんどん引き寄せちゃう。むしろリスクになる可能性もある。

○小川委員　どんどん来ちゃうんじゃないかと思いました。

○成澤区長　そうではなくて、その前の段階で、最終的には世界に留学してもらう子どもたちが文

京区から数多く育ってくれるのはいいことなので、仮にそうなったときにも、基礎的な学習の部分で物の考え方が、教科中心の学習ではなくて、ＩＢが求めているさまざまな年齢の課程における達成度をちゃんと確保できるような子どもたちにされているために、それを教える側のマインドセットができていないと元も子もないので、教員の研修のところからスタートしようというのが今回の狙いでございます。

○小川委員　特に区立の中学校とかは、受験で外に出てしまう子どもたちもいるような状況なので、逆に、こういう先生たちのマインドセットがどんどん高まっていった中で、区立中学の教育が充実すると、よりいいんじゃないかなと思いました。

○福田委員　何度もキーワードで出てくる探究的な学びというものが具体的にどういうことをイメージされているのかなというのを聞いてみたいのと、裏を返すと、そういうものを持った指導をあまりしてこなかったよねという自戒の念もあるのかなと思う。逆に言うと、どこを変えていきたいというものがあるのかなというのをお伺いしたいなと思います。

○教育施策推進担当課長　探究的な学びにつきましては、あるきっかけがあって、その中で疑問とか問いを子どもは見つけると思うんですね。その問いに従って必要な情報を集めて、課題解決の見通しを持った上で、最終的に問いの答えを見つけながら課題を解決していく。その過程で情報を集めたり、一回解決したんだけど、さらに新たな問いが出てきたり、またさらにその問いを解決していくというところが、探究的な学びのプロセスだと思うんですね。

じゃ、この学びが今の学校の現場でできていないかといいますと、文部科学省は、習得・活用・探究というふうに長年の間言ってきているので、試みはしてきていますが、残念ながらまだ不十分な状況。習得のところは非常に得意なんです。極端な話で言うと、知識を一方的に学習者に注入していくやり方はこれまで行われてきたんです。そこの部分は得意なんですが、それを探究的な学びに持っていくところまでが非常に大きな課題となっており、その授業がなかなか実践できていない状況はあります。

そういった意味で、この探究的な学びにすぐれた知見を持っている国際バカロレア機構にご協力いただいて、探究的な学びという視点でよくしていこうというのが、このプログラムの１つの大きな趣旨となっております。

○福田委員　わかった気になっているのかもしれないけど、習得は得意だけれども、確かに探究的な学びというと、どういうものだろうなと、自分自身にさえイメージがなかったです。一方で、これもまた日本人の気質なのかもしれないんですけれども、ここを変えていくのは先生方にとっても

結構大きなチャレンジだろうなと思います。

あとは個人的には、グローバル化、ダイバーシティ、インクルージョンなどいろいろ言われている中で、同質的に世界と何でも合わせていくことが必要だ。それを知りつつも、まず違いを知った上でといったところが改めて大事なんじゃないかなと思ったりもしているので、何でも合わせていけばいいとは思っていらっしゃらないとは思うんですけど、あえてそこは訴えたいなと思うところではあります。

○教育施策推進担当課長　大きな転換期なのではないかというご指摘のとおりなんです。窓口として教員研修はこちら教育委員会が行うのですが、区長にも先ほどご回答いただいたとおり、区長部局とも協力しながら進めていく大きなプロジェクトと考えております。

○成澤区長　我々、きょうここにいる理事者も含めて全員、「探究」という単語が入った学習指導要領は学んでいないんですね。小学校で 2021 年から、中学で 2022 年からとか、ここ１年で初めて「探究」がキーワードになった学習指導要領が完全実施になって、それをベースにした授業が始まっているということなので、現場でも試行錯誤がまだ続いている。ただ、恐らく次の学習指導要領の改訂の中では、かなりの授業時数をそこに割くことに多分なるんじゃなかろうかと言われていますので、それをどう先取りしていくことができるのか。求められたときに、先生たちもそれができるようになっていないとならないということもあって、この時点でＩＢ機構との連携を始めようというのが狙いの１つとご理解をいただければと思います。

よろしいでしょうか。

それでは、貴重なご意見をいただきましてありがとうございました。

３．閉会

○成澤区長　本日は、これをもちまして、令和６年度の第１回の総合教育会議を終了させていただきます。ご協力に感謝いたします。ありがとうございます。

（13：58）